

中学校社会科における OPPA についての研究

—まとめの活動における議論の有効性—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 大間 優

1. 研究の動機

現在子供たちを取り巻く環境は大きく変化している。新型コロナウイルスによるパンデミックは世界を大きく変えた。今までの価値観や常識が通用せず社会全体が大きな不安に包まれた。国際情勢も非常に不安定であり、東欧、中東や東アジアなど様々な地域で国際問題が山積している。また、これらの不安が価値観の対立を生み、社会の分断が徐々に広がりつつあることを認めざるを得ない。

このような今までの価値観が通用しない変化する社会と多様な価値観は社会科においては教科主義学力論の限界を示しているとは私考えている。科学的に社会を要素に分解し、生徒に対して知識・理解の習得を目標とさせる教科主義学力論は、急速に変化を続ける現代社会においては何の意味も持たない。教師が知識として生徒に伝達して形式的に記憶をさせたものは10年を立たずしてははや社会においては使い物にならなくなってしまうだろう。

「中学校学習指導要領（平成29年告示）社会」の社会科の目標には「現代社会の見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。」とされており、今までの教科主義的学力論から脱出し、社会科としての本質的な学びを促し、深い学びを実現するための思考力、判断力、主体的に学習に取り組む態度の育成がうかがえる。これは社会科における目指す生徒像が知識と主体性の両方を兼ね備えていることを示している。そのため、私はもっと学習者

の知識や考えの変容を焦点に当てていく必要があると感じている。そして、学習者の認知構造を明らかにしていくために中学校社会科において一枚ポートフォリオ評価が有効ではないかと考えた。

2. 研究の背景

2-1 一枚ポートフォリオ評価

一枚ポートフォリオ評価（以下、OPPA）とは、堀哲夫が開発した教師の狙いとする授業の成果を、学習者が1枚の用紙の中に学習前・中・後の履歴として記録し、その全体を学習者自身が自己評価する方法を言う。

学習による変容を学習者自身が具体的内容を通して可視的かつ構造化された形で自覚できるので、その変容から学ぶ意味を感じ取ることができる。また教師はそれを見て授業評価に活用することができるという利点がある。既に様々な教科や教科外の実践も広く行われておりその有用性が示されている。

OPPAの実践においては、教師がOPPシートを作成して用いる。ごく簡単に言えば、学習者が記録した学習履歴に対して、教師がコメントを書き、学習の質を高めるとともに、教師は授業の評価と改善を行う。

堀哲夫はこの学習や授業の進展及び学習者と教師の関係をOPPシートとの関わりをモデル的に図の1-1で示した。

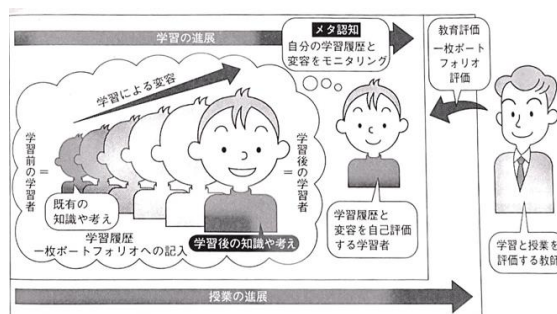


図1-1 OPPAにおける学習者と教師の基本的関係

これは授業や学習の進展とともに、学習者の既有的知識や考えが変容し、それを学習履歴としてOPPシートに記録、その内容を教師が確認し授業の中で適切な指導を行っていくとともに、学習者が自己の学習状況をモニタリングし自己評価を行うと言う概要を表している。ここで言うモニタリングとは堀によればもう1人の自分が1番高い立場から自分の学習状況や認知の過程を監視することを指している。学習者が自分の学習目標に対して学習状況がどのようになっているのかを把握することにより、学習者が自分で自分を認知することができる。

2-2 OPPAの基本的構造

堀によればOPPAは、「単元タイトル」「学習前・後の本質的な問い」「学習履歴」「学習後の自己評価」の4つの要素から成り立っている。

「単元タイトル」は教師があらかじめ書き込むか学習後に学習者に書かせる。後者の働きかけを行う意味は、単元全体を振り返り、内容を一言で的確にまとめる力をつけるためである。

「学習前・後の本質的な問い」は教師が学習者にどうしても実現して欲しい内容で、以下の2つの条件を満たすことが必要とされている。

①単元の本質に関わる内容を問いにする

単元を通して教師が学習者にどうしても伝えたい、わかってほしい、できるようになってほしいことを意味する。この条件の設定理由は、単元の中でこれだけは押さえておいてほしいという内容に対して学習前と後の実態を把握する必要があるからだと堀は述べている。

②本質的な問いを学習前と後で全く同じものにする

この意味は、学習者の学習前の実態を知り、それが学習によりどのように変容したのかを学習後に明らかにすることにある。さらに、学習者に両者を比較させることにより何がどう変わったのか、それに対して自分はどう思うのかなどの自己評価を行い、学ぶ意味や必然性、自己効力感を実感させることをねらいとしている。

「学習履歴」は、毎時間の授業後に学習者が「授業の1番大切なこと」を書く欄である。堀

によればこの欄については、OPPシートの目的を達成するために、以下の3点に配慮することが重要とされている。

①学習者が考えた「授業の1番大切なこと」を書かせること

この意図としては授業を受けた学習者の頭の中に何が残されているのかを知ること、その内容が教師の意図している内容とずれているかどうかを知ることである。

②授業終了直後に書かせること

学習履歴は適切な振り返りができていることが重要である。それが詳しくすぎても、また大雑把すぎてもよい学習履歴にはならない。可能な限り授業時間ごとに、授業が終わる時に書かせるのが望ましい。

③学習者の書きやすい形式で表現すること

文章でまとめる、図で表現するなど自分の得意な方法で表現するのが望ましく、要点が的確にまとめられてさえいればどのようなやり方でも認めるべきである。

「学習全体を通した自己評価」を行う時に重視しなければならない事は以下の3点とされている。

①学習者が学習目標を持つことができるような授業を行うこと

自己評価は、学習者の学習目標があつて初めて機能するためである。

②学習者が自己評価を行いやすいようにOPPシートを構成すること

自己評価の記入欄をただ作っておけばいいわけではなくOPPシートの構成要素の配列と言うのも学ぶ意味や必然性、自己効力感を引き出すことにつながっていく。

③学習前・後の単元を貫く本質的な問いの比較だけでなく、学習履歴まで含めた全体を自己評価させること

学習の振り返りは、OPPシートの一部だけを対象にするのではなく、シート全体つまり学習全体を対象にすることが重要であるとされている。

以上が、OPPシートを構成する各要素でありこれらの全ての要素が揃って初めてOPPAは成

立する。

2-3 中学校社会科における OPPIA の課題点

これまで OPPIA の基本的構造と構成要素について述べた。しかし、私は中学校社会科において OPPIA は二つの課題点があると考えている。

①学習者と教師の基本的関係しか示されておらず、他者との議論や合意形成の位置づけがないこと

OPPIA の理論骨子は学習者と教師で構成され、OPP シートの要素も教師と学習者がやり取りを行うことを前提にしている。しかし、議論やグループ活動など学習者同士の関わりでも変容は促すことができるはずである。特に社会科では議論や合意形成は重要であり、他者との関わりが必要であるため OPPIA の中にも他者との議論や合意形成が位置づけられるべきである。

②学習前・後の本質的な問いが知識の理解を目的としており、学習者の思考の変容の活用が位置づけられていない。

OPP シートの中の学習前・後の本質的な問いは「教師が学習者にわかってもらいたいこと」と定義されている。この問いでは教師が設定した教科内容を理解しているかという意味になるため、知識の理解が中心になっていると言えるだろう。しかし、その活用は OPPIA の中に位置づけられていない。社会科においては学習したことを活用して現代社会の諸問題等を批判的に考察し、議論を行う活動やテーマを決めて調べ学習を行うなどの学習者した知識の活用が求められている。そのため、学習前・後の本質的な問いを見直し、より学習した知識を活用できるような問いを設定するべきである。

OPPIA では教育実践を行う際にはその教科全体に共通する理論を明確にして、それぞれの内容に適用することが重要とされている。私は、先述した課題を解決するために池野範男の向上主義学力論と批判主義社会科を中学校社会科に共通する理論として取り入れたいと考えている。

2-4 池野範男の向上主義的学力論と批判主義社会科

池野範男の向上主義学力論が挙げられる。池

野は学力の成長を教師が生徒に問いを投げていくことで生徒の中で前段階の「見方・考え方」が組み替えられて再構成されていくものとして描く。また、池野はそうした「見方・考え方」が一足跳びに成長するものではなく順序性があり段階的に成長するものとして描いている。そして、池野は知識と情意を分離するのではなく、学習の中で連続的に位置づけるべきであると主張している。これは池野が「見方・考え方」について「理論」のように教師が知識として生徒に伝達して形式的に記憶させることができるような性質のものではなく生徒自身が主体的に事実を直接確かめ仲間たちと議論しながら既存の世界観を壊して再構成することで、自分のものとして心や体の一部となっていくような生徒自身の情意を含んだ性質のもの、かつ社会の理解だけでなくパフォーマンス全体の影響を与える性質のものとして捉えていたからである。

この池野の論は現在の教科教育研究における主な評価研究が個々の子供が一定の目標に到達したかどうかを調べる到達度評価が主流であり、学習の成果として子供がどの程度成長したのかということに目が向けられていないと言う問題意識から出発している。そして池野はその上で社会科教育における学力評価は、目標に到達したかどうかということではなく、できなかったことがどの程度達成できるようになったかということを経験的・資質・能力として捉えていくことが重要であると主張している。

また、池野は民主主義社会における社会科論として批判主義の社会科、もしくは市民社会科を主張している。批判主義の社会科は社会の具体的な現象における問題を取り上げ、その問題を具体的な形で基本的に解決する活動の中で、子供たちに社会に対する批判意識を形成し、根拠を持って理性的に社会を形成することを目指している。池野は、社会を批判的に作っていくという民主主義社会の原理を教科の教授原理にすることで社会科を民主主義社会の市民を育成しうる教科にすることができると主張

している。

その学習活動は社会的問題解決の原理と批判的研究の原理の2つから成り立っていると池野は分析する。学習活動はクラスの中での疑問を喚起して問題を作り出し、その原因や社会的機能、歴史的形成について学習し、現在論争されている問題に対して一定の結論を引き出し、最後に生徒相互において根拠を持って何が主張しうるのかを吟味しながら可能な答えを作り出す形をとる。これにより批判的議論による社会への意義申し立てと社会的議論による合理的で正当化可能な解決策の構築と言う民主主義社会の自律的市民に求められる活動を行うことができると主張している。この池野の向上主義学力論と批判主義の社会科は社会科において広く実践が行われその有用性が示されてきた。しかしその一方で池野の学力論の課題も指摘されている。

渡部(2019)では①「見方・考え方」の評価テストについてと②授業前の子供の「見方・考え方」の設定について課題があると指摘している。

「見方・考え方」の評価テストについては、池野は知識と情意を分離してはならないと繰り返し論じている割に開発している評価テストは子供が知識を有しているかどうか確認しているだけになっている点を指摘している。本来、池野の言う「見方・考え方」が情意を含むものであるならば、パフォーマンス評価もしくは聞き取りなどの質的調査は避けられないと思われる。しかし、池野はそうしたアプローチを採用しない。評価テストにも情意に配慮した形跡は無いと指摘されている。

また授業前の子供の「見方・考え方」の設定については、池野が開発した授業がいずれも、授業を受ける前の子供が、社会や物事を単純にそこにある存在として捉えているとした前提に立っていることを課題に挙げている。渡部はこの点に対し、子供の世界観を低く見積もりすぎであり、子供についての丁寧な観察が欠落していることを指摘している。

2-5 OPPAの論理的背景と批判主義社会科との関わり

ここでは、OPPAにおける論理的背景と先述した池野の批判主義社会科における関わりについて指摘していきたいと思う。

堀によると OPPA の背景にある理論や考え方は以下の7点とされている。

- (1) 構成主義の考え方に基づく学習・授業観
- (2) 学習者の資質・能力の育成を中心とした学力モデル
- (3) 学習の過程や変容を明確にするポートフォリオ評価
- (4) 学習の成果を適切に見取るパフォーマンス評価
- (5) 資質・能力を育成するための診断的・形成的・総括的評価
- (6) 学習者の思考や認知過程の内化・内省・外化の重視
- (7) 自己評価を活用したメタ認知能力の育成

堀は OPPA はこれらの7点が同時に扱われ、OPPシートの中で同時に可能にしていくところに最大の特徴があるとしている。

私はこの OPPA の論理的背景には池野の批判主義社会科と共通する部分と批判主義社会科の課題を克服する部分が含まれていると考えている。

共通する部分としては知識と活用の両方の育成を同時に図ろうとしている点②学習者の思考や認知の変容を重視している点である。①について池野は向上主義学力論の中で知識と情意を分離して行うのではなく学習の中で連続的に位置づけるべきであると主張している。これは OPPA で行われる学習者の思考や認知過程の内化・内省・外化と言えるのではないだろうか。毎時間学習者が自身の考えを再構成するために知識を取り入れ(内化)、それについて色々と検討し(内省)、外に向かって表現する(外化)と言う過程は、まさしく知識と情意を学習の中で連続的に位置づけていると言えるだろう。

次に、②について池野は学力の成長を教師が生徒に問いを投げかけていくことによって、生徒の中で前段階の「見方・考え方」が組み替えられて再構成されていくものとして描いてい

る。これは OPPA で行われる構成主義の考え方に基づく学習・授業観と一致しており両方とも他者との関わりによって学習者が思考や認知が変容していくことを重視していると言えるだろう。

そして、池野の批判主義社会科の課題の克服としては先述した渡部の指摘である①「見方・考え方」の評価テストについてと②授業前の子供の「見方・考え方」の設定についてそれぞれ① OPPA による学習の成果を適切に見取るパフォーマンス評価② OPPA による学習者の思考や認知行動の解明を挙げることができるだろう。

渡部の指摘の中にあつた批判的社会科の中で課題として挙がっていた子供に対する丁寧な見取りを OPPA によって実現できると私は考えている。

3. 本研究の目的

これらのことから本研究の仮説を「中学校社会科において OPPA を批判主義社会科の評価に位置づけることで、学習による変容が議論に表出し、議論の中で学習者の考えの変容が起こるのではないか」と設定し、本研究の目的を「思考の再構成を促すために OPPA を批判主義社会科の評価として位置づける単元モデルの開発実践」と設定する。

4. 研究内容

4-1 中学校社会科における OPPA の再検討

この項からは中学校社会科における OPPA の姿を明らかにするために先述した OPPA の4つの要素をそれぞれ再検討していきたい。

まず「単元タイトル」については、扱う単元によってそれぞれ異なり、既存の OPPA の論に従って決定しても、本研究では問題ないと判断している。

次に、「単元を貫く本質的な問い」では社会科の単元の本質に関わる内容を問いにすることと本質的な問いを学習前と後で全く同じものに加えて、池野の向上主義学力論を踏まえた社会の具体的な現象における問題を取り上げる必要がある。

池野の学力論における問いの例としては、社会的存在としての事実の確定(社会にそれがどのように存在しているのか)、社会的存在の存在理由の探求(なぜそれが社会に存在しているのか)、社会的存在の改善と正当性を追求(それはどのように存在するのが良いのか、なぜそれが良いのか)などが挙げられる。

そして「学習履歴」では学習者が考えた「授業の1番大切なこと」を書きやすい形式で表現することに加えて学習履歴から学習者ができなかったことがどの程度できるようになったかを総合的な資質・能力として捉えていく事が必要である。これは、学習の前後での学習者の質的な変容を動的に把握しようとする池野の向上主義学力論を踏まえている。

最後に「学習全体を通じた自己評価」については学習者が学習目標を持つことができるような授業を行うことと学習者が自己評価を行いやすいように OPP シートを構成すること、学習前・後の単元を貫く本質的な問いの比較だけでなく、学習履歴まで含めた全体を自己評価させることが必要である。

以上4つの要素について具体的に検討してきたがここで批判主義社会科における OPPA の5つ目の要素として「まとめの活動としての議論」を設定したいと私は考えている。事項ではまとめの活動としての議論の設定理由とその定義について述べていきたい。

4-2 まとめ活動としての議論の提案

批判主義社会科における OPPA の中に議論を設定する理由は、批判主義社会科が育成を目指す市民が自らの議論によって社会秩序を構成し、異議申し立てに対する合理的で正当な議論に基づく社会秩序の再構成を他の社会構成員と共同的に担うことができるような市民であるからである。

先述した OPPA における4つの要素はすべて学習者と教師の間でやりとりが完結するものである。これは、OPPA の目的が教師の行っている働きかけが学習者にどのように認識されているのかを明らかにするために学習者が物事や事象を認識する枠組みである認知構造を可

視的に表現し外化することにあることに起因する。

しかし、これでは批判主義社会科の目標原理である、社会秩序の構成と再構築を達成することはできない。学習者が社会はあるものではなく作られているものであると、実際に議論を通じて社会を作ることを経験することで認識し、私たちが作り出す社会が私たちの社会であると言うことを理解できるようにすることを目指さなければならない。そのために単元の中に議論を位置づける必要がある。

そして、授業前でも授業中でもなくまとめの活動として議論を位置付ける理由は2つある。

1つ目は、OPPAは社会構成主義の考え方を元にして作られており、学習者の学習前の概念から授業中にどのように変容したかを適切に見取ることを重視しているからである。

社会構成主義では、人が外界を認識するとき個人が持っている既存の知識や考えとどのように結びつくかを重視する。したがって授業や学習を考えるにあたってはまず学習者が自然の事象をどのように捉えているかを問題にする。この時、たとえ新しく学習しようとする内容でも人は日常の生活経験などを通して何らかの知識や考えを既に持っていたりするという前提に立つ。

しかし、この何らかの知識や考えと言うのは人によってそれぞれ異なる。またその中には誤りが含まれ、偏りが生まれている可能性もある。したがって、できるだけ正確に学習前の学習者の考えを見取る必要があり、その見取りによって授業中にどのような働きかけを行うのかを考えることこそ授業のデザインを考える前で大切であると堀は述べている。

そのため、授業前にテーマについての議論を行うとその学習者の学習前の考えや学習者の変容が見えなくなってしまうと言えるだろう。

2つ目は、社会の構成原理に基づいて、社会秩序を批判的に作り出すためには学習者の中に社会の構成原理や社会の要素間の関係や構造が概念として存在しないとけないからである。

池野は市民社会科について社会の構成原理に基づいて、社会秩序を批判的に作り出す評価と簡潔に定義している。つまり、議論の対象になるのは現在の社会秩序であり、学習者はそれを生活体験から獲得するか他者からの教授によってしか獲得することができない。そのため、学習前や学習中に議論を行うのではなくすべての学習が終わった学習後にまとめの活動として議論を行うべきである。

このように中学校社会科におけるOPPAでまとめの活動としての議論を位置づけることでOPPAの中学校社会科における課題を克服しつつ、批判主義社会科の目標を達成できると考える。以下、この単元モデルをもとに行った授業実践を示す。

5. 授業実践

調査単元名

新しい社会 公民（東京書籍）

第3章「現代の民主政治と社会」

第3節「地方自治と私たち」 計4時間

調査期間 2021年11月22日から11月31日

調査対象 山梨県内公立中学校3年生 一クラス 34名

単元の概要

第一時で単元を貫く問いである「なぜ地方自治は民主主義の学校と呼ばれているのだろうか」という問いを提示し単元の見通しを生徒に持たせる。そして地方公共団体と国の仕事の違いを考える活動を通して、地方公共団体の役割の背景にある地方自治の原則について教師の説明をもとに理解させる。第二時では、「地方自治はどのような仕組みで行われているのだろうか」という学習課題を設定し国の仕組みと地方議会の仕組みの比較をする活動を通して、地方自治の仕組みがより住民の意見を取り入れていることに気づかせる。その際、特に二代表制と直接請求権の仕組みに着目したい。第三時では学習課題を「地方自治の良い点と課題点は何

だろう」と設定し都府県の歳入とその内訳のグラフを見て気づいた事と課題を考える活動を行う。ここではグラフの読み方とグラフから読み取れる地方債が増えていて財政が悪化していること、依存財源の割合が多いことを考えさせる。そしてこの課題が国から独立して政治を行うという地方自治の原則から外れていることに気づかせる。また、その一方で住民投票やNPO活動など住民が自発的に行動し地方自治に参加している事例を取り上げ、住民参加がよりよい地方自治を作っていることを理解させる。そして、これまでの学習を踏まえたとえでもう一度「なぜ地方自治は民主主義の学校と呼ばれているのだろうか」という問いを提示し、生徒に学習前との比較を通して自身の成長を実感させる。第四時では、学習課題を「「よりよい民主主義の形」を考えよう」と設定した。まず、前時の学習で書いた「なぜ地方自治は民主主義の学校と呼ばれているのだろうか」という問いの答えを全体に共有する。その後、生徒に「地方自治も必ずしも完璧な民主主義とは言えないのではないか」という問いを出して揺さぶりをかけ、「「よりよい民主主義の形」を考えよう」という問いを個人で考え、周囲と交流した後発表する活動を行いたい。生徒の思考の枠組みとして「国の政治の仕組み・地方自治の仕組み」を設定し、それぞれの立場から意見を交わすことで周囲の生徒の民主主義観に触れ、自身の民主主義観を問い直させることを通して一人一人が主体的に考え、政治に参加する態度の育成につなげる。また、議論の際にはOPPシートとは別の課題シートを用いて記述や議論を行う。OPPAの各要素

単元タイトル：地方自治と私たち

単元を貫く問い：なぜ、地方自治は「民主主義の学校」と呼ばれているのだろうか

学習履歴：今日の授業で一番大切だと思ったこと

自己評価：学習前後を見比べて感じたこと考えたことを書こう

分析方法

OPPA や議論、課題シートの記述の分析を行う。

その際の視点はOPPシートの内容が議論や課題シートの中に消失するか、OPPシートの内容から議論を通して思考の変容・再構成が見られるかと設定した。

6. 結果と考察

OPPシートの記述の中から特徴的な記述を抜き出し表にまとめたものが図2-1である。

OPPシートの内容		
1	地方自治は身近である	12人
2	住民の意見が反映されている	15人
3	国よりも地方自治のほうが民主的だ	8人
4	住民自治	15人
5	団体自治	14人
6	直接民主制	6人
7	民主主義には話し合いが重要だ	3人

図2-1 OPPシートの内容

議論の課題シートの分析を図2-2に示す。

課題シートの内容		
1	直接民主制はより民主的だ	12人
2	国民の声を反映させることが民主的だ	18人
3	効率よく決定することも政治には重要だ	6人
4	話し合いは民主主義の大切な要素である	7人

図2-2 課題シートの内容

議論の際に選んだ立場は地方自治が19人、国の仕組みが5人、その他が1人であった。また、地方自治を支持する生徒は国民の意見を反映するべきという意見がOPPシートに引き続いて多かった。一方、国の仕組みを支持した生徒は効率を重視していた。両方の立場で民主的な政治には話し合いが重要だと考える生徒が増えた。また、OPPシートにはなかった国と地方自治のそれぞれ良いところを見出す考えが9名表出した。国や地方自治の仕組みではなく直接民主制や新しい政治の仕組みを提案する生徒は16名現れ、そのうち4名は、新しい政治の仕組みを、根拠を持って提案していた。またOPPシートで国民の意見を反映するべきという考えを書いていた生徒が課題シートでは直接民主制をよりよい民主主義と主張していたため議論を通して直接民主制に強化されたと言えるだろう。次にOPPシ

ートの内容が議論の中に表出した例を示す。Aさんの第二時学習履歴の内容が「国と地方自治の違いは投票回数である」であったため「どちらがよりよい仕組みだと思う？」と教師のコメントを行い、国と地方の仕組みの違いに着目するよう促した。そして、その後の議論でAさんは「国と地方自治はどちらも国民が選んでいるから本質的には変わらない」とその他の立場をとった。そして、学習感想ではAさんの意見に共感した国民が選んでいるから民主的であるという意見が6人見られた。これはAさんがOPPシートで自身の考えを再構成し、その意見が議論の中に表れ、周りの人の意見に影響を及ぼした事例と言えるだろう。

考察

OPPシートの内容が議論や課題シートの中に出出するかについては地方自治の理念（住民自治・団体自治）は共通して表出したが、OPPシートの段階では国の仕組みや民主主義観など議論につながるような視点の広がりには少なかった。議論では、地方自治の学習内容を活用して自身の立場を決め、意見を述べていた。これらのことからOPPシートの内容は議論や課題シートの中に一部表出したと言える。また、OPPシートの内容から議論を通して思考の変容・再構成は見られるかについては「本質的には国と地方の仕組みは同じである」「より直接民主制のほうが民主的である」など、OPPシートで形成された学習者の考えが議論を通して再構成され、既存の制度に対する批判的な視点とよりよい制度の提案、相互理解が生まれたためOPPシートから議論によって思考の変容・再構成は起こったと言える。

7. 今後の展望

今回の授業実践では、OPPAにおける議論を学習前や学習中に設定する学習後のまとめの活動としての議論で多くの思考の変容が見られたため、学習前や学習中の議論の有用性も示唆されたといえる。しかし、OPPシートの段階で国の仕組みや民主主義観など議論につながる

ような視点の広がりには少なかったことが課題として挙げられる。まとめの活動としての議論をよりよいものにするために単元計画の中でまとめの活動としての議論につながる要素をより表出させる必要があるため、本質的な問いやまとめの活動としての議論のテーマの検討、授業計画の系統性を今後の課題としたい。

参考文献

- 池野範男『批判主義の社会科』全国社会科教育学会『社会科研究』第50号、1999
- K・j・ガーゲン 永田素彦+深尾誠『社会構成主義の理論と実践』ナカニシヤ出版 2004
- 子どものシティズンシップ教育研究会『社会形成科社会科論－批判主義社会科の継承と革新』風間書房、2019
- 堀哲夫・石原裕『OPPAを生かした授業改善に関する研究－小学校5年生社会科における問題解決的な学習を事例として』教育実践学研究 2014
- 堀哲夫『一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性』東洋館出版社 2019